「狹夜中山敵討」から「石言遺響」へ

鈴木敏也

一

安永四乙未歳正月、堺町南新道葭町中山清七板と奥附のある「狹夜之中山敵討」は鐘由來夜啼石の六字を角書にした半紙形の五冊本である。毎冊凡そ十五丁前後で、ほゞその中頃に表裏各々異つた圖柄を持つた挿繪一葉づゝ（鳥居久豊畫）がある。序も目次も作者附もなく、標題の第一行につゞいて本文が始まつてゐるが、一面十二行で、殆んど平假名をもつて綴られ漢字は至つて少ない。尤も場所によつてはさうでもないが、大體の感じは假名草子を偲ばせる版式である。行文は極めて稚拙で、所謂お伽草子一派のたど〳〵しい彩も油氣もない姿をしてゐる。

體裁は右にとゞめて次に梗概を述べる。

聖武天皇の御宇、天平の頃に遠州日阪金谷の間、さよの中山のほとり菊川の奥に、一人の獵師が居たが、名を鵰平（くまだ）内左衛門と云ひ、月小夜八太郎と呼ぶ姉弟の子を持つた。八太郎は父が殺生を業とするのを悲しみ、時にふれて諫止したが一笑に附して顧みないので、ある大雪の朝、山蔭に熊の皮を冠つて伏し、父の矢先にかゝつて倒れる。母親は悲嘆の極、狂ひ出で菊川の邊で狂死した。その一念が凝つて蛇身鳥となり、住民を脅かし人肉を嚙むので近郷は騷ぎ

立つた。この噂が都に聞えて、三位良政が退治のため下向する事となつた。まづ二月堂に參籠し祈願をこめ觀音の靈夢を得、遠州に下つて蛇身鳥の出現を待つたが、化鳥は姿を見せず、良政は焦慮の中に日を暮らす。ある夜、平内の戸口を叩くものがある。娘の月小夜が出て見ると亡き母の靈であつた。三熱の苦みのため、人肉を喰ふ間だけの安易を貪つてゐるが、鑄鐘の功德のみがこの苦患を救ひ化鳥の身から解脫する事ができる。良政と夫婦となつてこの念願を果してくれ。われは良政に討たれて功を樹てさせやうと思ふ。仔細は菊川の水上にある菊水の瀧の高道仙人に會つて謀れと云ひ遺して姿を消す。月小夜は目ざめた父にこの旨を語つて、仙人を尋ねつゝ山に分け入る。（卷一）

月小夜はそこで仙人實は十一面觀音から琴の秘曲を授つた。良政は化鳥を索めて山深く入つたが琴の音に誘はれて茅屋に立寄り、こゝで月小夜と婚儀を擧げる。その時雷鳴閃電一天かき曇つて蛇身鳥が現はれるが良政に射落される。彼は月小夜に一體の觀音像を殘して、迎へを約して都に歸つた。しかし月小夜は迎へを待ちあぐねて都に上り良政の館に入る。良政は月小夜を寵愛するが、彼には正妻萬壽の前があり、その腹には香音姫があつた。二人の妻は表面は平穩であつたが萬壽前の嫉妬心は月の宴の夜半にろくろ首となつて月小夜を脅かす。良政も夢魔に襲はれたが目覺めてこの怪異を見、發心し佛道に歸依する。（卷二）

月小夜は蛇身鳥の子で、良政に復仇心を抱いて近づくものとの噂が立つ。萬壽は更に大野一學と計つて寶藏に忍入り、家寶獅子丸（鎧通し）を盜み出し、私かに月小夜の手筥に入れておいて、紛失を訴へさせる。良政は遂に月小夜を疑ひ、橘數衛に命じて人知れず失はしめんとした。數衛は花見にとて月小夜を誘ひ、山深く分け入つた。そこで主命を打開けたものゝ逡巡して斬りかねてゐるのを、却つて月小夜から促され、打落した笘の首が元のまゝなのに驚

く。月小夜が片時離さず持つ觀音像（良政から貰つたもの）が身代りに立たれたので、その首がなくなつてゐた。數衛はこの靈驗を良政に訴へる。良政は月小夜の眞心も明らかになつたので、その念願たる鑄鐘の事をも承諾する。萬壽は出奔したが丑の刻參をして怨を晴らさんとする。然るに滿願の夜、一老僧に會ひその教化によつて得度した。月小夜は呪詛のため病に臥したが、高僧の祈禱によつて癒え、良政は夢裏の詩偈を解いて數衛を遠州に遣はす。そこで光り物を見、その跡を索ねて觀音の首を得、その地を卜して一寺院が建立される。（卷三）

こゝに遠州山田村に元の北面の士、青木兵左衛門と云ふ人がゐた。その頃、零落の末、遂に家を捨てゝ修行の旅に上つた。妻は遺されたその子（姉五歳、弟三歳）と共に四年を待ち暮したが遂に病んで死ぬ。折柄、中山に觀音寺が竣成し、近郷からはそれ〴〵の品物を寄進する。二人の孤兒も柴刈の代をもて掛手拭を奉納せんとする。姉弟が仕事をしながら父の戀しさを語り合つてゐるのを、軒下に佇んで聞いたのは、行淸入道（父の兵左衛門）であつた。彼は忍び得ずして名乘り出で、三人は中山の邊りに庵を結ぶ。

觀音寺の鐘樓が成就して鐘供養のための寄進が多い。中に下金谷の玉と呼ぶ遊女は一尺二寸の鏡を奉納した。この女は同じ宿の文平なる者に思ひを寄せてゐるが、醜貌なのと貧家であるために、文平は見向きもせずかねと云ふ女と馴染んでゐた。玉は鏡寄進の利生で金持となつて文平の妻にならうと欲したが、思迫つて病に臥す。母は衆人の喜捨を得んとて街道筋で袖乞をする。玉の妹にいしと云ふのがあつた。いしは母と姉との苦勞を見るに忍びず、身賣して金を得んと企て、それを情人赤木傳内に計つた。その結果、金谷宿で契約をすまし身代金を懷にして夜道を家路に急ぐ。その夜、藤業右衛門は日阪の邊りで旅人を待つたが、通りかゝつたのは、かねて懸想してゐたいしであつた。挑

みかゝつて拒まれ、遂に斬殺して金を奪ふ。業右が家に歸ると、妻は何故に女の髮飾を取らなかつたかとて駈け出して行つた。彼は女の殘忍性にあきれ、一子を伴ひ妻の戻らぬ間に此地を去つた。

いしの死骸から胎内にあつた八月兒が生れた。石のほとりに赤子の啼聲がしたが、母の亡魂の通ふこと二百餘日に及んだ。その後はひとりで成長したが、毎夜三錢づゝ、里へ飴の餅を求めに來る僧があつた。ある夜、店の亭主は僧の後をつけてみたが、夜啼石の邊りで姿を見失つた。その頃行淸入道父子は、石像に日參してゐたが、夢枕に立つて捨兒を育てる僧はわれであるとのお告があつた。この捨子は母が刺された時、胎内にゐて舌を傷けられたので、三四歳になつても言語不明であつた。彼は敲鉦を鳴らしながら石像の傍で通行人の惠をうけてゐた。かの玉は文平に求婚したが、彼は金を調達すべき期限を定め、出來ない時はかねと婚姻する旨を答へた。この頃傳内はいしの仇を搜ねて敵討の旅に出た。（卷四）

月小夜の鑄鐘のため、良政の許を得て中山寺に赴き、十二月二十三日を期日とした。さて梵鐘は出來上つたが撞座に一面の鏡があらはれてゐた。それは玉の寄進した鏡で、彼女の執念であるとの噂が高い。しかし月小夜は觀音の靈、前に三日の參籠を果し、母の極樂往生の靈夢を見、西天紫雲の奇瑞を眺め、父親とも久々の對面を遂げて、再び都に歸り幸福な月日を暮す。

業右衞門は江州柏原の宿まで來たが、その夜石枕の計で殺されんとしたのを、逆に賊を取つて抑へると、昔の同類であつた。そこで此處に足を留め盜賊の首領となる。後妻を娶つたが、業右の伴れた繼子を虐待して、彼の留守ひそかに殺したのを彼は少しも氣付かなかつた。繼子の屍を埋めた所から生じた竹を、それと知らず笛を作つたところ、

その音によつて、後妻の惡行を悟り、彼女を山に誘つて谷に突落す。

傳内は木曾路で、ある虚無僧と同宿した。その者から柏原に不思議な笛を吹く男がゐると聞き、氣になるので近江に向ふ。明神の拜殿に一夜を明したが、計らずも、そこに集合した盜賊の商話によつて、業右衛門の素性を知り、妻の敵なる事を確める。それは、その頃業右を先妻が尋ね寄つたので、盜賊仲間の共の夜の集りに不參した事を、拜殿の天井裏に潜む傳内は耳にしたのであつた。夜の明けると共に、傳内は業右を搜り當て、決鬪の末、首尾よく仇を復した。彼は業右の妻には罪なしとて赦し、役所に屆出でゝ去つた。

玉は日限迫るも驗がないので鐘堂に上つたが、文平に對する瞋恚の炎はいよ〳〵燃え、遂に三丈ばかりの蛇身と化して、文平かねを取殺し、その首を喰へて中山の蘆の池に身を沈めた。その際、われに祈願すれば貧苦のものに福德を與へるが、その代り鐘を撞き破つて鏡を取除きくれと云ひ殘した。無間の鐘の由來はこれであると云ふ。（卷五）

二

以上の梗概によつて知れるやうに、この作品の筋立はかなり錯亂してゐる。標題の「鐘由來夜啼石」のうち「鐘由來」は本筋の一であるが「夜啼石」の緣起は極めて影が薄く、叙述が核心に觸れてゐない。題簽「狹夜中山敵討」の名稱も内容にふさはしくない。元來、敵討は事件の發生地を指すよりも、解決地を稱へるのが通則であるやうに思ふ。從つてこゝにも「江州柏原敵討」とでも呼ぶのが適切であらう。しかもこの作品の中核は敵討事件にあるのでなく、むしろ鑄鐘說話にあるから角書の「鐘由來」の方に眞實性が深い。かう云ふ事が問題になるだけ、作品を構成す

る說話系列の密度には輕重紛亂の相を呈してゐる。

冒頭に鵰一家の悲話がある。身を殺して父を諫めた孝子の至情は、母を狂死せしめ、父を改悛せしめる。この發心因緣談は蛇身鳥退治に絡んで、中央の名族たる良政卿と獵師の娘月小夜とを結び付ける。そこで鑄鐘發願と云ふ說話の根幹が樹てられた。これを繞つて妻妾の寵爭に依るお家騷動式の趣向に展開を見せたが、それも正邪對抗互に鎬を削ると云ふが如き昂揚は無く、たゞ丑刻詣程度の嫉妬の提撕に止り、觀音靈驗談によつて事件は解決する。以後は鐘供養に關する一線が顯晦的に斷續しつゝ最後の卷に至つて、月小夜の念願成就とその幸運、及び鵰一族の冥福を以つて終結されてゐる。

この根幹に次ぐ說話系列はおいし殺しに起因する復仇事件である。標題はこれを提示してゐるが、卷四の後半に初めて點出された副次的存在にすぎない。しかも敵役業右衞門の行動に重點を置いて筋が運ばれてゐる。而しておいしの悲劇の因としては、姉なる遊女玉の愛欲に對するこの妹の自己犧牲が擧げられる。この玉の狂戀が業右の凶惡と相並列しながら、何等の交涉も融會もなく、四五の兩卷に明滅しつゝ結末に達してゐる。一體、この作品に見える說話層は相互關係が極めて無頓着である。前述のやうに、卷三までに觀音寺建立の顚末を叙して月小夜の念願は一段落を告げてゐる。その後、卷四になると、突如として青木兵左衞門の遁世の話を揭げ、次で遊女玉の話を出し、こゝに初めて復仇事件の端緒を提撕してゐるのである。卽ち青木の話は全くの挿話と云つてよい。而して、更に「こゝに轟右衞門とて」云々と新人物を點出して敵役をあらはし、いしの情夫赤木傳內の名を示して討手の存在を語り、また夜泣石子育ての僧、行淸の日參する石像などを持ち出した。一體この邊りの筋立はすべて梶緖の切れた醉どれ船のやうに、

行き當りばつたりである。卷五も同樣で、月小夜の鐘供養、業右衞門後妻の繼子殺、傳內の復仇、遊女玉の怨念の四說話が並列されてゐる。要するに構成から見た「狹夜中山敵仇」は粗雜極まる安普請にすぎない。但、その素材にはいゝ木口も集められてゐるが、工人の技倆はそれを適切に使用し得なかつたと云ふべきであらう。

素材として目に立つのは、卷一では孝子の諫死、觀音の靈夢。卷二には仙人の通力を失ふ話（一角仙人式の高僧墮落說話系統のもの）、音樂魅惑說話（愛欲に因むもの）、ろくろ首（夢中の怪）。卷三には主命による長上殺害談（私意によつて助命するのは定型で、しかも「正」なるもの）、身代り說話（神佛靈驗談の一面、一首無觀音）、丑刻參。卷四の遁世談（刈萱傳說の俤を見せる）、鑄鐘傳說、夜啼石說話、偸盜談（三人法師物語の反映がある）。卷五にはまた觀音靈驗談、一つ家傳說（石枕說話）、繼子殺し、變形說話（屍より竹が生じ、作りし笛の音の怪奇）、無間の鐘に道成寺傳說を絡ませたものなどは、これである。

元來、この「狹夜中山敵討」は「小夜中山靈鐘記」（寬延刊本）を原典とするものであるから、包含する說話の素材も相牽引してゐる事は當然であらうが、それにしても、一篇の創作として面變りさせる以上、そこに構想の新彩、組成の改竄が在つて然るべきである。しかし先きに云つたやうに、お伽草子風のたど〳〵しい文體で、托鉢坊主が、わりをこぼすやうな叙述しか出來ないこの作家に對して、如上の注文は無理かも知れない。

三

文化元甲子歲に馬琴は『繡像復讐石言遺響』五冊（蹄齋北馬畫、中川新七、平林庄五郎合刻）を書いた。その大筋

を見るに「狹夜中山敵討」を粉本とした事は明瞭である。前記の素材の多數を巧みに配置し、新彩を加味すると共に、時代人物を太平記の世界に持ち込んだのであつた。彼が小夜中山の話に感興を覺えたのは、これより二年前、享和二年の五月から八月にかけた上方の旅、即ち「羇旅漫錄」に誌された旅の途上、親しく目堵した日坂界隈の地方傳說にあつたと思はれる。彼はこの旅次に於て腹案の徂徠するものがあり、「狹夜中山敵討」を囑目するに及んで、構想忽ち成つて落筆したものと推測してよからう。此年三月、中村座の三番目狂言「長者丸鐘鑄櫻」なども冥々の裡に多少の示唆を與へたと見るのは考へすぎであらうか。しかも彼は尙、同年草双紙「小夜中山宵啼碑」（三冊）を書き綴る程この題材に感興を持つたのであつた。

馬琴は「石言遺響」の自敍の中に「遠陽子夜山寺、鐘石之故事、傳口碑也尙矣、然傳無考据、緇流之說半屬干妄誕先輩甞論其事迹者凡二本、或以爲天平中事、或以爲弘安中事、其年紀相拒五百餘年其說互異、享和壬戌年予親經歷其地、而問諸古老、而得其淵源云々」と見える。即ちこれによつて彼が胸裏の創作過程を推知する事ができるのである。

こゝで「石言遺響」の筋立を一卷（二章より成る）づゝ提示して、「狹夜中山敵討」との交渉を展望したい。

（一）、東福寺の兆殿司が鎌倉へ赴く途中、遠州菊川の邊りで、中納言宗行・右少辨俊基兩卿の亡靈を見た。建武中興が成つたにも拘らず、當路の官人たちは彼等を弔慰する事もなく、日夜安飲に耽つてゐる。その宿怨を晴さんとて相語るのを、彼は夢幻の間に目堵したのであつた。この怪異を見て念誦の後、兆殿司は槇の原なる里に來て、ある茅屋に宿を求めた。それは俊基卿の遺子月小夜姫の寓居であつた。彼は姫に、父の冥福を祈るため阿八嶽（あはだけ）の觀音寺に供鐘（くがね）の寄進を勸める。姫には遺臣春木爲宗が忠實に仕へてゐた。

（二）、月小夜はその志を果さんため、許嫁に當る日野三位良政（資朝の弟）を京に訪ねんとしたが路銀がない。その頃、菊川では蛇身島と云ふ怪鳥が行人を脅かすので、朝廷から討手を向けられる事になつたが、良政にその命が下る。良政は折柄識者のために參候を止められてゐたのを、藤房卿が推擧したのであつた。ある夜、俊基の靈が月小夜の枕上に現れ、訓誡を與へた後、われ怨念によつて怪鳥と化したが婿の高名のために討たれようと語る。月小夜は琵琶を彈じて、下向した良政を導き、その茅屋で再會する事を得た。（以上、卷一）

この範圍に於ける「狹夜中山敵討」との交渉は、まづ月小夜の素性が獵師駒平内の娘から俊基卿の息女に經上つてゐる。蛇身島の出現は、獵師の妻の悲痛からの怨念が、一轉して俊基卿の鬱憤の所產と變化してゐる。而して拱鐘寄進に關しては、一を冥界の母自らの悲願に據るとし、一を兆殿司の勸誘にかゝるものとした。又、月小夜の良政への因緣は、亡母の示唆を變して、豫ての許婚の間柄とした。それには氏素性によつて自然的に取扱はれてゐる。尙原典では菊川の水上に住む高道仙人を月小夜が訪ねる事になつてゐるのに、馬琴はこの仙人を阿八が嶽の頂上に無間の鐘を掛けた人となし、その後身なる一行脚僧が鐘を埋めて觀音寺を建立したとし、改めてこの寺に拱鐘を勸進すべく月小夜の行動に關聯せしめてゐる。この高道は一旦月小夜の美貌に恍惚として久米仙の二の舞を演じかけるが、法力を全く失はず、瀧壺で垢離した月小夜に、觀音と現じて琴の秘曲を授ける。この琴の音に良政は牽きつけられるが、馬琴はこれを琵琶となし、亡き俊基卿への手向として彈ずるのを、折柄その邊りを彷徨ふ良政の耳に入ると趣向に立てかへてゐる。

（三）、怪鳥は良政の矢先にかゝつて退治され、月小夜は人知れず悲嘆にくれる。功名を立てた良政は念持佛の觀音像

を月小夜に與へ、迎への者を下す約束をして上洛した。朝廷では嘉賞せられ、侍女萬字前を賜はつたので、困惑したけれど是非なく家に迎へた。一方、月小夜を遠江から伴ふために橘主計介を使とした。月小夜の都上りを機會に、老臣春木爲宗は嘗て俊基卿に殉死し得なかつた義によつて切腹する。その時、主計介は感激して、わが弟主税をして春木の家を繼がせん事を誓ふ。京の日野家では二妻相諧讓して圓滿に見えたが、月小夜が續いて二子（小石姫・香樹丸）を擧げたので、萬字の前は心平かならず、嫉妬にかられて讒謗するので、良政と月小夜の間に溝が出來る。

（四）、萬字の前は貴船明神に丑刻詣をする。それを月小夜は夢裡に知る。その頃、かの怪鳥は俊基卿の化身で、月小夜は父の仇として夫を覘つてゐるとの噂が立つ。良政は、彼女の護身の短刀を見てから漸く疑念を生じ、遂に主計介に命じて白川の奥で失はしめんとする。然るに觀音像が奇瑞を現はし、身代りに首が落ちる。主計介は元應寺和尚に月小夜を託して良政の前を取繕つた。一方、萬字は月小夜の二兒をも殺さうと計つたので、主計介は弟主税をしてこの二兒を伴れて月小夜に從はしめ、遠江に赴かせる。主從は莊の窪と云ふ里に閑居する。さうして主計介は弟主税を頓死と披露した。（卷二）。

「石言遺響」のこれまでは「狹夜中山敵討」卷二の後半から卷三に當る所である。萬壽前は既に良政の北方として香首姫なる一女があつたが、これを馬琴は恩賞としての美女萬字前とし、香樹丸を月小夜の生むところとし、別に一女小石姫を創造してゐる。嫉妬の表現には飛頭蠻式のろくろ首は採らずして初めから「鐵輪」式の丑刻詣とした。蛇身鳥に絡む復仇心を月小夜讒謗とする點は踏襲したけれど、家寶獅子丸を偸んで彼女の手筥に入れると云ふ姦策の煩はしさは、こゝでは護身用短刀の嘗見と云ふ簡素に換へた。山路への誘致、觀音の身代りはそのまゝに繼承し、忠臣橘

數衛を橋主計介としたが、その弟主税を別に點出して、後段への伏線を作つた。而して「敵討」では月小夜の運命は疑晴れて安泰となり、鑄鐘の宿望を得、夢想の詩偈に敎へられて觀音寺を建立するに到るなど、すべて神佛の冥護による光明世界へと展開してゐる。これに對して馬琴は、この母子をして忠臣に庇護されつゝ世上を踏晦するの荊棘の路を迴らしめてゐる。一方萬壽は出奔して丑刻詣をなし、一老僧に敎戒されて安易道を得るに終るが、萬字前の「明日」はそのまゝに殘されてゐる。

（五、月小夜は鑄鐘の急願を果さんために尼にならうとて峰の寺に赴くが、老僧はその美貌の故をもつて許さない。その歸途、意を決して髮をきり、路傍の家に託したまゝ行衛を晦ます。二兒は待てども〳〵母が歸らないので、傳內（主税の改名）と共に搜ね廻り、その書き殘した和歌によつて遁世を知る。――この間十年を經過する――清道尼と名のる月小夜は、東北行脚の後、更に西國に赴かうとして遠江に入り、ひそかにわが家のほとりを窺ふ。折柄萱を刈る二兒に見咎められ、名乘りかねてゐる所へ、傳內が外から歸つて來て、請はるゝまゝ遂にその家に足を留める。

（六、これよりさき、萬字前は、ある日長谷寺詣から歸つたが、その後熱を病み魔されて舊惡を口ばしる。良政が主計介に問ひ訂すと、すべてが事實なので驚駭する。直ちに月小夜を呼戻さうとしたが、折から足利の兵亂が起つて果し得ない。萬字は病癒えたが居たたまらずして出奔する。途中、山賊に襲はれ難義の折、隈高業右衛門なる者に救はれてその妻となる。彼はもと北條高時の臣鶴見一學であつた。二人は東國へと志し、小夜中山の邊に住みつき、追剝を業とする。萬字も名を蘆と改めて男を助ける。業右衛門には先妻の子の盲兒があるが、彼女はそれを虐待する。一方、月小夜は病死する。その臨終に香樹丸は芳野の宮廷に赴くこと、小石姫は傳內の妻となることを遺言する。かく

して傳內は香樹丸を送りがてら拱鐘勸進の旅に出る。（卷三）

この卷での月小夜遁世は了然尼（後に云ふ）と刈萱との組合せであるが、「狹夜中山敵討」からはその卷四に見える北面の士青木兵左衛門出家の飜案である。清道尼は行清入道の變形であるが、行清の話は單に挿話に終つてゐる。而して刈萱の佛は双方一脈相通ずるものがある。この青木兵左衛門を採つて、馬琴は春木兵左衛門爲宗に仕立て、俊基卿の遺臣とし、その養子の主税を傳內と改名させて「狹夜中山敵討」（卷四）の一人物赤木傳內を採擇してゐる。萬壽前は既に得度されてゐるが、萬字前はこゝに舊惡露顯から漂泊の旅に出で、計らずして隈高の妻となる。この隈高は「狹夜中山敵討」（卷一）の冒頭にある鵜平內右衛門と同書（卷四）の畠業右衛門とを綯交ぜにした一人物で、その行動にも準據する點が多い。尙、鶴見一學の名が萬壽前の腹心であつた大野一學の反映なのも明かである。

（七）、小石姫が留守をしてゐると翌年の春立つ日、一行脚僧が訪れた。母の忌日とて招じ入れると、それは兆殷司であつた。奧州からの歸り路で、先年菊川で見た怪異を語り懇ろに月小夜の靈を弔つて去る。（その時の話によれば俊基は怪鳥と化し、宗行卿は女人の害を企らみ、廉子、勾當內侍、萬字前は皆その祟りのなす業との事であつた）。さて業右衛門の家では盲兒八五郎が繼母の虐待に堪へず家出する。折柄吹雪の夜で、業右は山路で旅人を射殺し衣服を剝いで歸つたところ、それが我兒のものと分つて驚く。さすがの彼も暫く家に閉ぢこもつてゐた。小石姫は夫の旅歸りが遲いので、鐘寄進の金の些少なるべきを憂ひ、身賣を決心して菊川の驛に赴くが、有夫なのと身重の理由で、相談整はずして歸る。その途中、沓掛の松原で夜盜業右の刄にかゝつて殺される。屍から胎兒の出たのを、通りがゝりの旅僧が拾ひあげて去つた。

（八）、一足違ひに傳内は戻つて來た。妻の屍を運ばうとしたが、動かないので其處に葬らうとて掘下げると、一個の壺が現はれ、中には砂金が滿ちてゐた。これを鑄鐘の料として納め、墓標には圓石を置いた。業右は小石姫から奪つた錦の袋を見ると、首のない觀音像が出て來た。妻から嘲られながら黄金だとて嬉んでゐる。妻は殺されたのが女と聞き、その衣裳を剝取らなかつた事を罵り、自分で飛出して行く。業右はその淺ましさにつくづくと憫れ、家を捨てて去る。

此頃、齊掛の松原では圓石の邊で嬰兒の泣聲がするとの噂が高い。夜毎に里の飴屋に飴を求めに來る僧がある。ある夜、亭主が後をつけると僧の姿は消えて、石の傍に嬰兒がゐた。そこで峰の和尚と相談してその兒を養ふことにする。當時、傳内の家の掛物の觀音像が拔けて白紙となつてゐるが、時々、子供を抱いた姿をして現はれる。傳内は妻の三七日の忌日をもつて鑄鐘を初める。菊川の驛長愛宕宗仲の娘玉衣はかねて傳内に想をかけて言寄るのを、忌明まで待てと諭してゐた。しかし鐘の成る日、傳内は妻の屍の傍に落ちてゐた尺八を敵の手がかりとして仇討に發ふした。玉衣はそれと知つて怨み悲しむ。（卷四）

この卷四は大凡「狹夜中山敵討」卷四の後半に當る。遊女玉の妹おいしが小石姫となり、同名の傳内は前者では情人で、孝信貞の妙ちきりんな道義論を說く男であるが、後者では正しき夫で吉野朝の士流たる風格を備へてゐる。「石言遺響」の八五郎は、かの八太郎に當るが、彼の諫死が計畫的な必然であるのに對して、これの狂死は偶然的である。而してその父に與へた刺戟にも深淺があつた。又、馬琴の八五郎は一面、かの蠶業右衞門の一子の役柄をも承けてゐる。卽ち八五郎手馴れの尺八は、その父の手に渡つて傳内復仇の契機を作るが、かの蠶の子はその屍から竹を生

じて笛と化してゐるのである。その外、美女玉衣と傳內とが、かの醜女お玉と文平とに當る事は云ふまでもない。文平の情婦かねに當る人物は割愛されてゐる。尙、此卷での夜啼石を繞る傳說の取扱は、馬琴の作はさすがに整齊を保つてゐて、かの作の紛糾錯雜した素材の亂列とは比べものにならない。

（九、玉衣は峰の寺に上つて、怨ある人を引戾さんため、鐘を撞かうとするのを、和尙に見咎められ、訓戒されて飴屋の家にゐる嬰兒を養育する事をひきうけた。これは觀音のお告げによるので、それを果せば將來は幸福が得られると云ふのであつた。旅路の傳內は近江柏原で一軒家に宿る。家には小者と幼兒と居るだけであつた。小者が主人を呼びに行つた後で、幼兒は厠に行かうとして簀子を踏みぬき、穽穴に落ちて非業の死を遂げる。傳內は賊の家と覺つて待ちうける。

（十、歸つて來た主人は女で、見覺えがあると思つたのも道理、萬字前のなれの果の整であつた。彼女はこれまでの惡業を懺悔してその素性を明す。卽ち北條の舊臣鹽飽勝重の娘であつた。父は牒者として俊基卿に仕へ、あらはれて殺された。彼女は宮廷に入り良政に近づいたが、月小夜を却けて後、出奔して賊業右衞門の妻となり更に近江路まで流れ來たのであつた。かくして彼女は自刄したので、傳內はそれを葬つた後、旅を重ねて攝津に入り宿河原まで來る。こゝで、いろをし坊と呼ぶ梵論がゐたが、傳內の持つ尺八に目をつけ、首無しの觀音像と交換せんと申し出た。傳內はそれによつて妻の敵と知り、名乘りかけて首尾よく討ち果した。傳內はその足で吉野に赴き、良政及び政致（香樹丸）に面謁し、朝廷からは山城介に任ぜられる。更に遠江に引返して鐘供養を行ひ、月小夜・小石姫の靈を弔ふ。而して玉衣の養ふ嬰兒は小石姫の胎から生れたこと、觀音の畫像の拔け出したものは嬰兒を養ふ飴を求めるため

であつたことなどを知る。そこで玉衣を側室とし、飴屋を厚く犒つた。それを聞いた京の兆殿司は、大施餓鬼を行つて諸靈の冥福を祈つた。その中、南北朝合一して、政敎等は榮達の幸運に惠まれる。（卷五、終）

この卷は傳内の仇討を中心として說話を進行せしめ、その後日譚を穩藉の中に締めくゝつてゐるが、「狹夜中山」（卷五）は既述の如く幾條かの筋立が並列してゐる。馬琴は柏原の場面を本筋の仇討とせずして、單に萬字前の最後場として、更に宿河原まで延長せしめてゐる。たゞ「一つ家」の石枕を陷穽と變へて多少の連關を偲ばせた。屍の竹から作つた笛が「破麗弓無欲、今一實母見」などと珍妙な文句を音に立てるのを、馬琴は尺八の音色として「千代までも賴めし若枝枯れゆけば綠の林色やかはらむ」（第四卷）の歌に、賊父への諫言を寓してゐる。又、お玉の狂亂は醜穢を極め「道成寺」式の蛇體となるが、玉衣の方は灼熱の戀も純情に返り、道成寺ぶりから、爽やかに脫却させてゐる。かのお玉が、戀敵の女おかねと「鐘」と、寄進用の「金」とに對する「かねに恨は數々ござる」の、飛んだ無間鐘緣起は聊か讀者を啞然たらしむる外はない。馬琴はもとよりこれを削除して了つた。

四

以上は「狹夜中山敵討」と「石言遺響」との交渉、換言すれば馬琴が前作を如何なる程度にまで換骨奪胎して活用したかを踏査して見たのである。次に「石言遺響」を構成するに當つて、どれだけの新素材を組込んだかの點を明かにしたい。その前に「夜啼石」と云ふ、この作品の核心に關する記錄に就て一瞥を興へる。（舊蹟たる當所の刊行にかゝる緣起式の談義本は措く）。

「狹夜中山敵討」から「石言遺響」へ

15

まづ『東海道名所記』（萬治年間刊、淺井了意）に

むかし西坂（日阪）の里に女ありけり。かなやの里に親ありて行きける道にて、ぬす人のために殺され侍り。その女孕みて此月子産むべきにてありけるに、こゝの右の方なる山の内にある法師の住みけるが哀れがりて、母が腹を割き子をとり出して育て、その子十五になりける時、法師かう〳〵と物語りしければ、うち泣きて法師にもならず、寺を忍びいでて池田の宿に行きて、ある家に使はれ者となり、田作り柴刈りて月日を送り立居寢起きに常に口誦みて「命なりけりさよの中山」と云ひけるを、主聞きて日頃經て、後に問ひけるは、常に「命なりけり」と云ふ歌を口誦ぶは如何なる故ぞと云ふ。この者うち泣きて、我は腹のうちにて母に別れ父も行方なくなりぬと云ふ。主驚きて曰く、腹のうちにて母におくれたりとはいかなる事ぞと問へば、わが母は某の生れ月に當りて人に殺されて空しくなりけるを、腹を割きて取り出し育てられ侍りといふ。主の曰く、それは佐夜の中山にての事なり、その殺す人は隣の家のあるぢなり。その時、母が身にまとへりし小袖は何々の色なり。不便なることぞかし。敵を打ちなばわれも力を添へ侍らむとて、その夜隣りの主を討ちけり。命なりけりといふ歌を唱へて親の敵をうちけり。その子は出家して山にこもり父母の菩提を弔ひ侍り、その寺に無間の鐘あり。二月初午の日、開張あり云々。

その後に夜啼松の記事があるが、石の事は見えてゐない。

明和八年の毛護夢先生の紀行には「……挾神飴餅賣聲促、出石途石夜啼專」の狂詩があるので、此頃には飴も石もあつた事がわかる。（三田村鳶魚氏、「膝栗毛輪講」より）

更に「煙霞緣談」（安永二年刊、遠江、西村白烏）を見ると、

佐夜中山夜泣石と云ひはやらせしは享保の中頃よりのことなり。其始め佐夜中山久延寺に近き並木松に古木ありしを、土俗夜泣きの松と呼ぶ。古き道中記にも見えたり。彼の孕女を殺害せし跡なりと云へり。享保の中頃雷墜ちて此松枯れたり。その近きあたりに丸石とて昔より往來の眞中にあり（中略）夜啼の松枯れて後は、此石へ夜啼きの名を描して淨るりにも作り出せしより、いよ〳〵世上に夜啼きの名高し云々

松から石への名稱の轉化は有りうべきことである。これは鄉土人の考說であるが、「外題年鑑」に「佐與中山夜泣石」（寶永七年七月十四日豊竹座、若大夫）とあるのを信ずれば、この享保以後の說は崩れて來る。

降つて馬琴の「羇旅漫錄」（享和二年）には

遠州小夜中山夜泣の石は日阪より十七八町ばかり東、山の往還にあり。無間山は街道より一里半なり。掛川の驛の外れより右の方に見ゆ。こゝより見れば甚だ高し

新坂蕨餅兒育飴　由來傳世夜啼碑

鯨音斷絕無間事　大士方便垂大師

子育觀音、小夜の峠久圓寺にあり。淡が獄、阿波手の森神社、無間山觀音寺にあり。

とある。この旅の見聞が「石言遺響」の腹案を示唆したであらう事は既に觸れた通りである。

姙婦の屍から兒が生れ、その母の靈が哺育すると云ふ話は「頭白上人緣記」（鄉土研究第一卷第二號所載）もそれである。この出典は「旃陀越國王經」にある。旃陀王の寵姬が姙娠して、他の夫人に妬まれ讒により殺されて埋められ

る。塚中の兒を母の半身朽ちずして乳を與へる。三年の後、塚が崩れて兒は地上に出で、晝は鳥獸と遊び、夜は塚に歸る。佛がこれを憐んで出家せしめたが、後羅漢となる。佛は彼に命じて父王を教化せしめた。王に憂色あるを見て、何のためぞと問ふと嗣なきを憂ふと答へた。彼が笑ふので王は殺さんとしたが、彼は輕く擧り飛翔し、上つて空中に住み、分身散體、無間に出入する。王これを見て恐れ入つたと云ふ。南方熊楠氏はこれが小夜中山など同一說話の原據であらう、無間の鐘の名もこゝに有るのではないかと云つてゐられる。たゞ亡靈が子を育てる話だけを採りあげるなら「うぶめ」の說話となる。

五

かく馬琴は、近世期の鄕土傳說を採つて吉野朝外傳とし、これを「太平記」の世界を彷徨せしめたのである。而して更に點綴するに多樣な說話をもつてした。それらの素材を簡單に列擧して置きたい。

(ア)冒頭に見える俊基宗行兩卿は史上の人物として周知である。その典據は云ふまでもなく「太平記」卷二の「俊基朝臣再關東下向の事」にある。尤も俊基卿は菊川で斬られたのでなく、承久の昔を偲んで一首の歌を宿の柱に書いた。而してその死は一章を距つた「俊基被誅事」に叙せられてゐるが、こゝには關係がない、承久の亂に當つて、菊川で刑せられた人を太平記の東下りの文には光親卿とあるが、事實は「石言遺響」のやうに宗行卿で、その記錄は「吾妻鏡」卷二十二、承久三年七月の條（十日及び十四日）に見える。

(イ)兆殿司が俊基宗行の靈を見る所は「太平記」卷三十四「吉野御廟神靈の事」で上北面の士が俊基資朝の靈に逢ふ

の條の俤がある。

（ウ）蛇身島の事は「太平記」卷十二の「廣有射怪鳥事」に據るものである。この怪鳥の叙述の類似は明らかにそれを語る。尤も「狹夜中山敵討」に使用されてゐる事を忘れてはならない。

（エ）怪鳥退治には「平家物語」卷四の鵺退治がある。三位賴政と三位良政との類似を看過できない。その上、恩賞として美女を賜はる事項さへ同一である。かの猪早太はこゝの橘主計に當る。

（オ）二人妻娭妬のことには刈萱傳說の俤が漂つてゐる。二妾双六盤に凭つて假睡する時、女人の髮が小蛇となつて絡むと云ふ話は「藤澤遊行上人緣起」に見えるけれど、こゝに見えない。しかし、月小夜が淸道尼となつて故鄕に歸り萱を刈る二兒を見、名乘りかねる條などは「刈萱」の反映を有力とする。

（カ）貴船の丑刻詣りは謠曲「鐵輪」に所緣があり、嵯峨天皇御宇のある公卿の女に話の糸をひくものである。

（キ）月小夜が萬宇前に欺かれ良政に對面する時、袖で鼻を蔽ふ話。（女の寢てゐるうちに良政は墨でいたづら書きをすると敎へ、良政には月小夜は殿の口が臭いと厭つてゐると告げる）。これは楚王の寵姬鄭袖の故事（鄭袖は「あなたの鼻の形が王はお厭ひだから隱せ」と讒者に欺かれる）に據る。

（ク）月小夜が峰の寺で、美貌のために尼になることを許されぬ話は、了然尼の事實を採つてゐる。その記錄は「新著聞集」五、「紫の一本」等に見える。（國文學攷第四卷第二輯「了然尼のこと」參照ありたし）

（ケ）塹が、殺された女の衣裳を剝がんとした條は、室町期小說の「三人法師物語」の一節で、近世期にはしば〳〵利用された題材である。菊池寛氏の「恩讐の彼方」の一挿話としても周知である。

（コ）玉衣が觀音寺の鐘を撞くのは「道成寺」の俤であると既に云つたが、この無間山觀音寺緣記による女人拱鐘の說話は、早く歌舞伎の所作事に仕組まれてゐる。元祿二年、大阪、荒木與次兵衞座の「傾城小夜中山」では傾城葛葉（玉島主水）が撞き、同十四年、京の早雲座では同じ狂言で水木辰之助が勤めた。世間的に有名なのは元文四年四月（大阪竹本座の操り）の「ひらがな盛衰記」に見える梅が枝の手水鉢であらう。それを馬琴は戀の女の情熱に托したので「娘道成寺」を聯想せしめるのである。

（サ）近江柏原の宿は「一つ家」の型であり、謠曲「黑塚」に遡るものである。馬琴は既に「敵討枕石夜話」の主材として用ゐてゐる。

（シ）宿河原の仇討は場所人名ともに「徒然草」（百十五段）に採りそれを作中人物に結びつけてゐる。

右、個條書とした外に、觀音靈驗談とか繼子いぢめとか、廣い分野に亘る說話が採擇されて、重要な位置を占めてゐる事は改めて云ふに及ぶまい。又、馬琴と競爭者であつた京傳の讀本の素材との交涉も一問題となる。例へば月小夜對萬字前は「稻妻表紙」（文化三年）の銀杏前對蜘手の方であり、了然尼はそのまゝ「安積沼」（享和三年）の一人物となり、業右衞門たがねは「曙草紙」（文化二年）の蝦蟇丸・野分に酷似し、死胎分娩の話も、同書の玉琴の死を聯想せしめる。これらは大體京傳への影響である。

以上は「石言遺響」が「狹夜中山敵討」に據らない素材を並べて見たのである。尤も前後の連絡上多小は敍述が重複した點もある。こゝで一言したいのは「太平記」關係の材料に關しては後藤丹治氏が「太平記の研究」に於て、微細に亘つて檢討せられてゐる。殊に文章上の克明な踏査ぶりには全く敬服するものである。但、その中に「石言遺

響」の素材の事で私がお叱りを蒙つてゐた。私は初め一友人から聞いた時、「石言遺響」に就ては別に發表してゐない筈だがと思つた。なる程拙著『近代國文學素描』(二六〇—二六一頁)の中で、文化初年頃の馬琴が取材機構の手法として傳說說話を廣汎に涉獵すると云ふ例に、石言遺響」小夜中山泣石の傳說を中心にしてはゐるがまづ太平記に所緣して(中略)素材には三人法師物語、道成寺傳說一つ家の傳說(下略)云々と擧げたのであつた。しかしあの場合には紙本提示までの行がかりはない筈である。それを紙本の名を擧げないからとて頭から信憑し難いとやられると、前記の素材はすべて無緣佛となつて成佛できぬこととなる。的外れに覘はれたのはいゝ面の皮であるが、あの素材共を見殺しにするわけにはゆかない。やはり彼等は緣ある衆生として濟度したいと思ふのである。

六、

素材措據の方面はこれまでとし、更に文藝作品としての構想に就て最終の節を綴りたい。

「石言遺響」の主核は小夜中山夜泣石に絡む仇討物語である。この中心說話は全篇から云へば、その後半卽ち第七編以後に當り、その前半たる第二編から第五編までは月小夜姫の薄命哀史である。而して第六編は前後を結ぶ橋渡しの章として介在し、第一編は事件の發端を語つてゐる。換言すれば前半では月小夜の宿命を語り、後半では、その女婿傳內の復仇事件を敍したのである。それ故に夜泣石傳說に重點を置いて見ると、ここに到達するまでの說話の展開はかなりに長帳場と云はねばならない。卽ちこの作品は同程度の重要味を持つ二個の說話を連鎖せしめて構成したのである。具體的に云へば母なる月小夜の半生を前にし、その娘夫妻の半生を後として結合したもので、前後一貫する

條としては鐘の寄進と云ふ事象と、妖婦萬字（後のたがね）の惡業とが纏絡されてゐる。

まづ前半に就て考察する。ここに配置された五章を貫く幹線は月小夜對萬字前の閨房相剋の悲劇にある。女主人公月小夜の薄命記は、冒頭から既に親知することが出來る。彼女は南朝の忠臣俊基卿の遺兒として遠州の僻地に佗住居してゐた。父は怨念によつて怪鳥と化し、それを討たんとて許嫁の夫は京都から下つて來る。父の慈愛と忍從とによつて、夫は功名を樹て、その身は夫と再會するの幸運に惠まれる。而して上洛して家庭の人となるが、夫の傍には既にかの功名の嘉賞としての側妾がゐた。閨房異變はこの可憐な淑女を虐げずには措かなかつた。夫の愛撫によつて二子を設けた事が、妖婦萬字をしてその殘虐性を暴露せしめるの契機を作つた。彼女の奸計に呪はれた月小夜は、夫から疑惑の眼を向けられる。ロさがなき噂は、護身の短刀によつて窮地に陷るの結果を招いた。けれど觀音の奇瑞と義臣の善謀とは白川に於ける慘劇から救濟した。この義臣橘主計は嘗て春木爲宗の忠節に感激して、己が弟をして春木の名跡を繼がしめるだけの誠實と熱意との把持者であつた。即ち月小夜に對する從來の同情が敢然として行爲の上に現はれたのである。萬字が月小夜の二子に向つて更に魔手を伸ばさんとするや、彼は策謀によつてその邪惡と對抗しなければならなかつた。かくして「正しき者」の一行は、京を去つて遠江に移つた。即ち第三篇の後半以後、第四編の京の卷を挾んで、場面は東海の一寒驛に立歸つたのである。

佗しいながらに平和の日が廻つて來た。けれど月小夜の太陽は生れた時から曇つてゐた。父の冥福を祈るための扶鐘發願が、彼女の双肩に重壓を加へてゐた。兆殷司の訓言は、夢裏にも彼女の耳底に響いてゐる。峰の寺の和尚は彼女に緇衣を許さなかつたけれど、彼女自らはその咀はれた宿命を悉知してゐた。そこで二子を捨てた。主稅（傳內）

の「誠」と「正しさ」を信じてゐたからである。彼女の勸進の旅は十年の星霜を重ねた。東北の行脚を終へて西國に赴かんとする時、その足は自然に遠州の地を踏んでゐた。彼女は刈萱道心の意志を遂げんとして、しかも感情のために囚へられたのであつた。こゝに女心の「はかなさ」と「美はしさ」とが認められる。流離の幾年も、生ひ育つた兒女の前には何ものでもなかつた。彼女は家庭の溫かさに抱かれつゝ病んで死ぬ。その臨終の遺言は亡父の遺志であり、それに對する孝養でもあつた。卽ち一子香樹丸を吉野朝廷に赴かしめる事と、傳內に依囑した梵鐘勸進の旅の繼續とが、それである。彼女の一生は秋風落寞とも云ふべき寂しい一生であつた。夫の愛に活きたのも束の間で、たゞ「正しきもの」との和樂生活の短い日數と、信仰に生きんとした淸くして強い志操とを外にしては、暗憺たる荊棘の道と沈寥たる孤寂の日との連續であつた。讀本に多く見える「虐げらるゝ女性」の一典型とも見られるけれど、月小夜には「寂しき人」の面影が泌み〴〵と感得される。この點で型に嵌つた人物とは見たくない。

第六編は前後の二部をつなぐ楔子である。而してこゝの中心人物は萬字前である。彼女の妖婦型の素質は旣に第三第四の兩端に於て嫉妬による讒謗と丑刻詛とに現はれ、戀敵たる月小夜及二子を失はんとする陰謀によつて昂揚されてゐた。この編では病中の囈言から、さきの日の惡業が白日に曝され事件の眞相が暴露するに及んで逃亡を餘儀なくされた。しかも山賊の難を一浪士に救はれ、こゝに第二段の惡業の因を作る。妖婦萬字はたがねの名によつて新しい「生」を踏み出したのである。それは浪士業右衞門との結合による「惡」の道への第二の門出であつた。外にあつては追剝、內にあつては繼子いぢめ、たがねの新生活はその名を改めたと同樣に、一段の醜惡味を加へてゐる。

第七編の初めに兆殿司が再び顏を出す。留守居の小石姫が母の忌日とて請じ入れる。作者が奧州からの歸途として

彼をこゝに點出したのは、作品の二部作たる形式を指示するものと思ふ。かくしてこの編以後は傳內中心の說話として最後に及んでゐる。卽ち全篇の後半に當る夜泣石傳說を繞る復仇事件が、この四つの編によつて展開するのである。尤も夜泣石の話に入る前曲として、業右の惡業たる實子殺の悲劇を据ゑた。家出した盲兒をそれと知らず、吹雪を迎る旅人と誤認して射殺する。この事件はさすが凶暴の彼を屛居せしめるが、彼は再び出でゝ小石姫を虐殺する。茲で作品は漸くにして題意に叶ふ因緣に觸れたのである。中核の位置としては、遲きに失するといはねばなるまい。而して業右の得た首無觀音は、前段白川の場を享け、更に後段宿河原の場を結ぶ因果の脈絡を引くものであるが、こゝでは單に妻の嘲笑を買ふだけの役割しか演じてゐない。かくして業右は妻の殘虐性に、追はるゝが如くこの土地を去る。計らざるに實子を害し、重ねて陰慘なる妊婦殺戮を敢てし、首なき佛像を咀はれたる蠱物のやうに、身に附けて走る業右の心境に、作者はこゝで一段の悔悟と自責とを提撕すべきではなかつたか。かゝる心境を語る事件としての道具立は備つてゐるが、心境そのものゝ具象性を示唆する描寫を缺いてゐる。この邊りはむしろ怪奇妖異の敍述が多きにすぎる。盲兒所有の尺八から歌聲が響いたり、小石姫の死屍が動かず、そこを堀れば砂金が現はれたり、幅物の觀音像が拔け出したり、支那怪奇談の反照ではあらうが、漲りわたる幻怪の色調は、作中人物の心理行動を寫すに先だち、事件の集積による說話の複雜性をもつて讀者の感興に訴へんとした。この點は筋書本位の作品には常套的手法ではあるが、考察して慊焉たらざるを得ない。

更に夜泣石傳說の重要人物、卽ちこの作品での小石姫の存在の影は甚しく薄い。幼にして運命の星に惠まれず、父に別れて母と流離し、長じては鐘勸進の成果を案じて身賣を決意し、その歸路人手にかゝつて非業に死する。彼女の

一生は悲慘の極であつた。しかもその敍述は、通り一ぺんの報告程度にすぎない。作者はこの後半に、ある力點を据ゑて、この悲劇の女主人公をば、傳說の中心人物らしく周匝の留意を以て取扱ふべきであつた。小石姫に對する創作上の「いたはり」は吝かであつたと云はねばならぬ。次で、寫された菊川曜長の娘玉衣の盲目的な愛戀と捨子養育に當る心情とは、直前に重なる事件の幽暗陰慘なだけ、かなりの寬潤と快適とをもたらして氣分緩和の上に効果あるものを思はせる。

傳內は芳野の旅から歸ると同時に愛妻の橫死に直面した。彼は咀はれた一家の宿命を痛感し、且不可思議なる冥慮に切實な思を致して、妻の死と引換へにしたやうな黃金をもつて、宿望の梵鐘鑄造に着手する。月小夜が兆殿司によつて勸誘せられた俊基慰靈の念願は、漸くにして果を結んだのである。無間の鐘の由來だけを說かんとするのなれば、物語はこゝで終結されてよい。しかし小石姫の仇敵の一條がまだ取殘されてゐる。傳內にはまだこの一事件の解決が必要である。彼は純情にして灼熱的な戀を振りすてゝ復仇の旅に上る。作者は凶賊業右夫婦を既に分離せしめてゐる。こゝに於て傳內の行手には、この二人を別々に出現せしめねばならない。柏原の宿の茅屋はその第一段である。「一つ家」式の趣向は先蹤に引きづられたもので、奇巧ある手法とは云へないが、女賊の態度には別趣をかもし出すものと云つてよい。傳內に喝破されたがねが、悔悟のために自刄するのは毒の最後を飾る作者の好意的取扱であり、この行動を敢てする素因として、氏素性ある女性なる事を提撕した。作者はこゝに恩讐の因果と武家階級のもつ一種の信念とを肯定せんとしてゐる。しかもそれが正義を前にしては無意義の反抗に終るべきを明示した。こゝに馬琴の道念の一端が介在するのである。

「狹夜中山敵討」から「石言遺響」へ

傳内の復仇の旅は第二事件を以つて終る。宿河原の場面はあまりに徒然草の投影が著しい非難はあるが、いろをし坊との應對に、互の所持品に絡んで、素性を明るみに持ち出す說話進展の手法は巧緻である。前後の照應もあり、事件解決としての昂揚もある。これ以後は後日譚としての常套事項であり、前條に散見する個々に對する說明でもあつて贅言を要しない。こゝで傳内が玉衣を側室として納れた事は、作者の神經質的な道義觀のあらはれであると同時に武家社會に於ける「義理」であつたことを忘れてはならない。

最後の南北朝合一は、全篇の總括であると共に、冒頭への照應でもある。俊基宗行兩卿の建武中興に對する不滿は卽ち馬琴自らの歷史觀である。しかし作者は文藝の範圍を踏越えて直接に史論を揭ぐる事なく、たゞ趣向の上で俊基を怪鳥として警世の具となし、宗行をして女人の害毒を覿面たらしめて廷臣を自省せしめんとした。而して、吉野朝に關する敍述はすべて表面から影を潛め、僅かに良政とその子政敎（香樹丸）の榮達にその片鱗をあらはしてゐるにすぎない。けれども第一編に於ける菊川の怪異にはその中に馬琴の吉野朝史に對する批判の聲あるを否定することはできない。

要するに、この一篇は、夜泣石無間鐘の傳說を中心とし、低調なる「狹夜中山敵討」を踏まへ「太平記」の世界の中に融しこんで構成したものである。この「太平記」に所緣するために、南朝秘史としての面影を偲ばせるが、それは單に假裝にすぎない。衣裳を脫げば中味は民間傳說を種子とする復仇談である「石言遺響」が歷史小說でない所以はこゝに在る。

尙、「太平記」の文辭がこの作品の隨所に散見する事は、作者馬琴の愛讀書たるこの軍記物語の名調子が、折にふれ

て筆端に迸つた結果で、模倣とか剽竊とか稱すべき筋合のものではない。從つてそれらの片言隻語を引用對照することは文藝批評の上で、さして意義ありとも思はれない。